

募集班長の模型部屋（第12回）

皆さんご無沙汰しております。皆様のおかげで、この春も多くの若者たちが自衛官として採用されました。彼らの自衛官としての人生が充実したものになることを願っております。で、その入隊業務のため、ちょっと忙しくなりました。・・プラモを作る暇が無く、模型部屋が更新できなかった事をお詫びいたします。

そんなわけで、今回は・・・



203mm自走榴弾砲です。

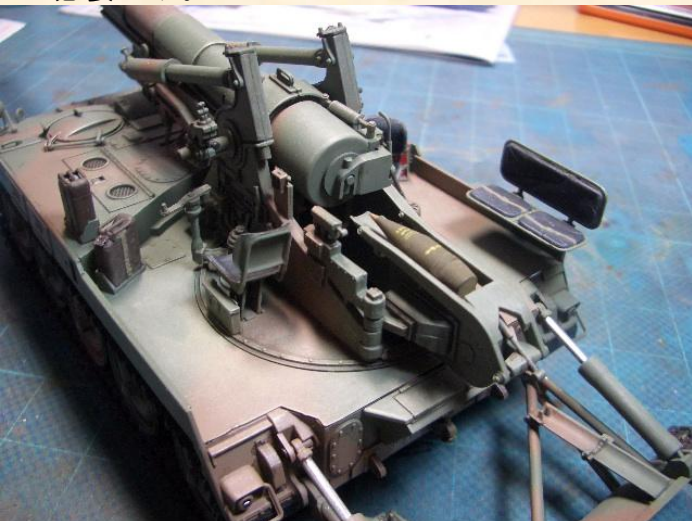
イタレリ社のこのキット。現在陸自に配備されているタイプとは少々異なっております。砲塔周りの防護壁や工具箱等、装着されていないのですが、初号機はまだ、このタイプだったらしく、OD一色に塗られていた時代でした。その後、平成に入ってから2色迷彩に塗装されていきましたが、もしかしたらそのままのタイプで塗られていたかも・・と勝手に想像して作りました。装備部隊の方からお叱りを受けそうですが、もし違ってもご容赦ください。

私が北部方面總監部広報室に勤務していた際、当然そこでも自分の模型を飾っていました。それを見た人事班長から、「齊藤、プラモ好きならこれ上げるよ。」と渡されました。

特科大隊出身の方だったので、転出の際に記念に渡されたそうなのですが、作れないまま月日が流れ、どうしようかと思っていた時だったのでちょうど良かったそうです。



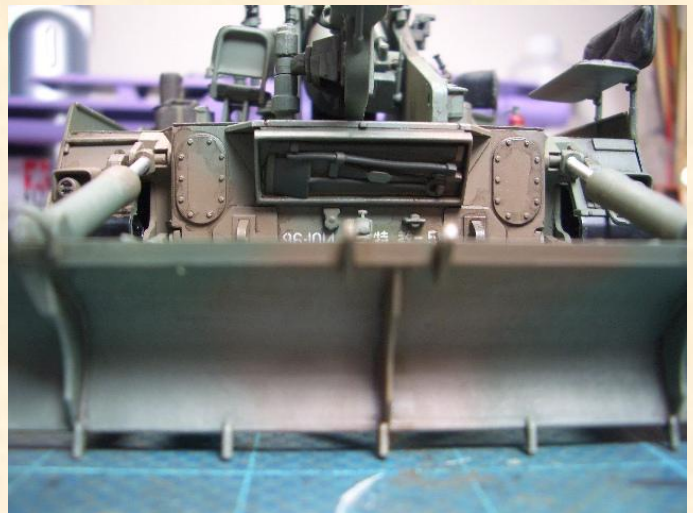
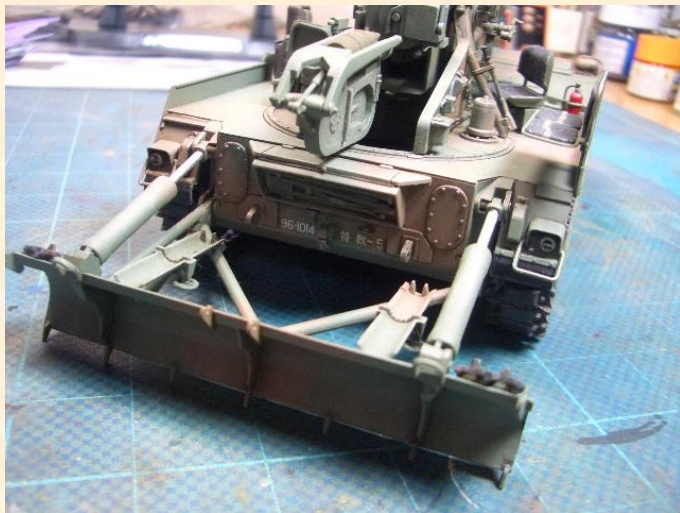
部品はそこそこに抑えられ組みやすいキットでした。ディテールはやはりちょっと・・・と思いましたが、あえてそこを改造することなくストレートに作りました。陸上自衛隊最大口径火砲だけに、その大きさに圧倒されてしまいます。まだ99式自走榴弾砲が配備されていなかったのが、模型棚の中でも目立っていました。可動ギミックが多く、完成した後もいろんな箇所を動かして遊べるのですが、油断すると部品が折れてしまうので注意が必要です。



こんな感じで装填動作を楽しめます（笑）完成した後、広報室の特科隊員に見せたら射撃号令をかけながら喜んでいました。



射撃姿勢をとると、このような感じでさらに大きさを感じ取れる姿勢となります。デケェ！この火砲、富士山を飛び越えて弾を撃つことが出来るくらい飛ぶのだそうです。当たり前ですが、戦車砲では考えられない射程です。



発射時の反動から車体を固定するための大型の駐鋤（ちょうじょ）です。

私は最初の部隊が北海道の北千歳駐屯地の第71戦車連隊だったのですが、同じ駐屯地の第1特科団にこの自走砲が装備されていました。最初に実車を見たとき、何でドーザが付いているんだ？と思いましたが、部隊の隊員の話聞いて納得。もともと米国製であるため、諸所に英語で表記された部品があり、「舶来品」的なところも垣間見えました。

操縦装置は簡単に見えましたが、乗り心地はどうなのかな・・・良く聞いておけばよかったですね。戦車ほど早く走ることは無いと思うのですが。



マーキングは最初に装備された特科教導隊第5中隊としました。間違えていたらすみません。記録写真ではそのように見えたので・・・



移動のための走行姿勢はこのように砲身を後方へ下げて駐鋤を上げて固定するそうです。キャタピラは昔ながらのポリエチレン製で、塗るにも接着するにも苦労しました。ちょっと不自然な扱い方ですが、ご容赦を・・・



砲弾もキット化されていますが、塗装指示がありません。自衛隊の砲弾資料を参考にしました。白い環は砲弾を吊り上げるためのもので、射撃直前に右の金色の信管を取り付けるのです。なんかタケノコみたいですね。当然これだけで飛んでいくわけでなく、砲弾を装填した後、発射装薬をその後ろにさらに装填して発射することになります。

次回は・・・自衛隊車両の完成品が無いので何になるかお楽しみに！後ろの「ガミラス3段空母」ではないことは確かです（笑）

それではまたお付き合いくださいね。